

1 概況

(1) 気象概況

－気象庁資料からみた、平成25年の月別の気象概況は、以下のとおりである－

1月 北日本から西日本にかけて低温となり、中旬に東日本や東北地方の太平洋側で大雪となった。

日本付近は冬型の気圧配置となり、寒気の入る日が多く、月平均気温は北日本から西日本で低かった。北日本から西日本の日本海側では曇りや雪の日が多く、特に2日頃と25日頃に低気圧が日本付近を発達しながら通過した後は、冬型の気圧配置が強まり、大雪や暴風雪となったところがあった。北日本から西日本の太平洋側では晴れの日が多く、月間日照時間はかなり多かった。13～14日に低気圧が発達しながら日本の南岸を通過したため、全国的に荒れた天気となり、東日本や東北地方の太平洋側では平地でも積雪となり、横浜市で13cmの積雪となるなど大雪となったところがあった。沖縄・奄美では、前半は気圧の谷や寒気の影響で曇りや雨の日が多かったが、後半は高気圧に覆われて晴れる日もあり、天気は数日の周期で変わった。

2月 北・東日本で低温となり、北日本日本海側で記録的な積雪となる場所があった。沖縄・奄美の平均気温はかなり高くなった。

月のはじめに、日本海を発達しながら通過した低気圧に向かって暖かい空気が流れ込み、全国的に顕著な高温となった。その後は、日本付近を数日の周期で低気圧が通過したが、低気圧の通過後は冬型の気圧配置となり、寒気の影響を受けやすかった。このため、北・東日本は低温となり、北日本から西日本にかけての日本海側では曇りや雨または雪の日が多かった。北日本から西日本にかけての太平洋側では、晴れの日が多かったが、低気圧の影響により数日の周期で雨や雪となった。

中旬の終わりから下旬の中頃にかけては、北日本を中心に、冬型の気圧配置となり強い寒気の影響を受けた日が続き、顕著な低温となった。また、北日本日本海側から北陸地方にかけて大雪となり、これまでの降雪と低温により積雪の深さが大きくなっていくところでは、青森県の酸ヶ湯で積雪の深さが566cmとなるなど、全国の積雪を観測している330地点（気象官署を含むアメダスの数）のうち、アメダス9地点で年最深積雪の大きい方からの1位の値を更新し、アメダス13地点では2月の月最深積雪の大きい方からの1位の値を更新し、記録的な積雪となった。

沖縄・奄美では、天気は数日の周期で変化した。月のはじめには顕著な高温となり、その後も南からの暖かい空気の影響を受けた時期があり、月平均気温はかなり高かった。

3月 月のはじめに北日本を中心に暴風雪となった。東・西日本の降水量はかなり少なく、東日本以西では平均気温がかなり高くなった。

月のはじめに、発達しながら日本海から北海道を通過した低気圧や通過後の冬型の気圧配置の影響により、北日本を中心に暴風雪となり、人的被害のほか交通障害の発生など、大きな影響が出た。その後は、短い周期で北日本付近を低気圧や前線が通過し、低気圧の通過後は一時的に冬型の気圧配置となり、北日本は日本海側を中心に曇りや雪または雨の日が多かった。

一方、東日本以西も、月を通じ短い周期で天気に変化した。移動性高気圧に覆われることが多く、月降水量は東・西日本でかなり少なく、月間日照時間は西日本日本海側、沖縄・奄美でかなり多かった。また、南からの暖かい空気の影響をたびたび受け、東日本以西では月平均気温がかなり高くなったが、日々の変動も大きかった。東・西日本の26地点で、月平均気温が高い方からの1位を更新した。

4月 上旬に北日本から西日本にかけての広い範囲で大雨や暴風となった。東・西日本中心に気温の変動が大きく、一時顕著な低温となった。北・東日本と沖縄・奄美で多雨となった。

日本付近を低気圧と高気圧が交互に通過したため、北日本から西日本にかけて天気は数日の周期で変化した。6～8日にかけては、日本海と本州の南岸沿いを発達しながら通過した低気圧の影響で、北日本から西日本にかけての広い範囲で大雨や暴風となった。北・東日本では、この大雨のほか、低気圧や前線の影響を周期的に受けたため、月降水量が多くなり、北日本日本海側では顕著な

多雨となった。また、日本付近は10日程度の周期で強い寒気が南下したため、一時顕著な低温になり、東・西日本中心に気温の変動が大きかった。21日は北日本や東日本の内陸では雪となり、福島、長野では1961年の統計開始以来最も遅い積雪となった。沖縄・奄美では、前線や気圧の谷の影響により曇りや雨の日が多く、多雨・寡照となった。

5月 上旬は全国的に気温がかなり低かった。東・西日本では、降水量がかなり少なく日照時間がかなり多かった。

上旬は、この時期としては強い寒気が日本付近に流れ込んだため、気温は全国的に平年を大きく下回った。北日本では寒気や気圧の谷の影響により曇りや雨または雪の日が多かったが、東・西日本では冷涼な高気圧に覆われて晴れた日が多かった。沖縄・奄美では寒気や湿った気流の影響により曇りの日が多かった。

中旬から下旬前半にかけては、北海道では寒気や気圧の谷、海からの湿った気流の影響により曇りや雨の日が多く、気温の低い状態が続いた。東北地方と東・西日本では、高気圧に覆われて晴れた日が多く気温が高くなった。沖縄・奄美では、梅雨前線の影響を次第に受けるようになり、沖縄、奄美地方では10日頃、梅雨入りした。

月の終わりには、日本の南で高気圧が強まった。北日本から西日本にかけて南から暖かく湿った気流が入りやすく、曇りや雨の日が多くなった。また、全国的に気温は平年を上回った。九州南部、九州北部、中国、四国、近畿地方では27日頃、東海地方では28日頃、関東甲信地方では6月10日頃、梅雨入りした。

月の終わりを除いて高気圧に覆われやすかった東・西日本では、晴れた日が多く、5月の降水量の平年比は、西日本太平洋側では34%と、5月としては統計を開始した1946年以降最も少ない値を更新、また5月の月間日照時間の平年比は、東日本太平洋側では136%、西日本太平洋側では128%と、5月としては統計を開始した1946年以降最も多い値を更新した。

一方、月の前半を中心に寒気や気圧の谷の影響などを受けやすかった北日本日本海側と、前線や湿った気流の影響を受けやすかった沖縄・奄美では曇りや雨の日が多く、北日本日本海側の月間日照時間は、かなり少なくなった。

6月 北・東・西日本で気温が高くなり、沖縄・奄美ではかなり高くなった。北日本太平洋側で降水量がかなり少なく、北・東日本日本海側で日照時間がかなり多かった。

月前半は、北日本、東日本日本海側では高気圧に覆われて晴れる日が多く、降水量は平年を下回った。また、東日本太平洋側、西日本では、日本の南の梅雨前線や台風第3号の影響で曇りの日が多かったが、関東や九州の一部以外では降水量は平年を下回った。12~13日は晴れて、また、日本の東の高気圧や台風第3号の影響で南から暖気が流入したため、北・東日本日本海側、近畿を中心に高温となり、全国の気象官署12地点で13日に6月としての日最高気温の高い方からの1位を更新した。沖縄・奄美では、梅雨前線の影響を受けにくかったため晴れた日が多く、気温は平年を上回り、降水量は平年を下回った。沖縄は11日頃に梅雨明けした。

月後半は、北日本では、上空の寒気や梅雨前線の影響で曇りや雨の日もあったが、高気圧に覆われて晴れる日もあった。また、降水量は少ない状況が続いた。一方、東・西日本では、梅雨前線の影響で曇りや雨の日が多く、降水量は平年を上回った。東北は15日頃、北陸は18日頃に梅雨入りした。18日から21日にかけて西日本から東日本に停滞した梅雨前線や台風第4号から変わった低気圧の影響により、北陸、西日本、沖縄では大雨となり、総降水量が300mmを超えるところもあった。23日から26日かけて九州から日本の南海上にかけて停滞した梅雨前線と低気圧の影響により、西日本で大雨となり九州南部では400mmを超えるところもあった。

月平均気温は、中旬前半に暖かい高気圧に覆われ、南からの暖気の影響も受けたため、北・東・西日本で高くなった。梅雨前線の影響を受けにくかった沖縄・奄美では、晴れて気温もかなり高くなった。北日本、東日本日本海側では、高気圧に覆われて晴れた日が多かったため、北日本太平洋側の月降水量は6月としては統計を開始した1946年以降、最も少ない値を更新した。北・東日本日本海側の月間日照時間はかなり多くなった。

7月 梅雨前線が日本海から東北地方に停滞することが多く、山口県・島根県などでは局地的な豪雨があった。西日本では高温となった。

月を通して梅雨前線が日本海から東北地方に停滞することが多く、太平洋高気圧は西日本を中心に張り出した。このため、西日本では、晴れの日が多く、太平洋側では降水量がかなり少なかったが、月のはじめと終わり頃に前線や気圧の谷の影響で曇りや雨となり、28日には山口県や島根県では局地的に記録的な豪雨となった。東日本太平洋側では、上旬の後半から中旬にかけては晴れの日が多かったが、上旬の前半と下旬は気圧の谷や前線の影響で曇りや雨となり、特に下旬は雷を伴った大雨となったところがあった。北海道では北海道の東海上の高気圧に覆われて晴れの日が多く、降水量が少なかった。一方、東北地方と東日本日本海側では、曇りや雨の日が多く、梅雨前線の活動がたびたび活発化したため、大雨となった日があった。東北地方の降水量は平年の182%となり1946年以降で7月としては最も多い記録を更新し、日照時間もかなり少なかった。

沖縄・奄美では、太平洋高気圧に覆われて晴れの日が多く、日照時間がかなり多く、名瀬（鹿児島県）や久米島（沖縄県）では月降水量が0mmとなるなど少雨となった。一方、八重山地方では12日～13日に台風第7号の影響で暴風雨となった。

気温は月の前半は、南からの暖かい空気の影響で全国的に高温となり、優勢な太平洋高気圧に覆われた東日本以西では強い日射の影響も加わって猛暑日となったところも多かった。西日本ではその後も高温が続き、月を通してかなりの高温となったが、北・東日本では月の後半は前線や気圧の谷の影響で晴れの日が少なく、東北地方を中心に平年を下回ったところがあった。沖縄・奄美では、上旬はかなりの高温となった。

8月 東・西日本、沖縄・奄美では気温がかなり高かった。日本海側では降水量がかなり多く、秋田県・岩手県などで局地的な豪雨があった。

月を通じて太平洋高気圧が日本の南海上から西日本付近にかけて強かったため、東・西日本、沖縄・奄美では晴れて暑い日が多く、月平均気温はかなり高かった。北日本は、気圧の谷や湿った気流の影響で曇りや雨の日が多かったが、南からの暖かい空気が入りやすく、月平均気温は高かった。8月上旬後半から8月中旬は、日本付近で太平洋高気圧の勢力が特に強まり、東・西日本中心に、晴れて厳しい暑さが続いた。7日から22日にかけて、連日全国の100地点以上のアメダス観測所（集計地点数927）で猛暑日となり、11日は297地点で猛暑日となった。12日には、江川崎（高知県四万十市）で日最高気温が41.0℃となり歴代全国1位を更新した。8月上旬は沖縄・奄美で、8月中旬の平均気温は北・東・西日本で、それぞれの旬として1961年の統計開始以来第1位の高温となった。

一方で、日本海側では西よりの湿った気流の影響で局地的に非常に激しい雨が降り、大雨となる日もあった。このため、月降水量は日本海側でかなり多かった。9日には秋田県と岩手県で、24日は島根県で記録的な豪雨となり、河川の増水や土砂災害が発生した。東日本太平洋側と沖縄・奄美では、湿った気流の影響が小さかったため月降水量が少なかった。また、西日本太平洋側は平年並だったが、山陽や四国の瀬戸内側以外では少雨のところが多かった。これらの地方では、少雨の影響で農作物の被害が発生したところや、取水制限を実施したところがあった。

9月 台風第18号の影響で、北日本から西日本にかけての広範囲で大雨となった。西日本では日照時間が多くなり、沖縄・奄美の一部の地域では少雨が継続した。

上旬は、秋雨前線が本州付近に停滞し、沖縄・奄美を除いて全国的に曇りや雨の日が多かった。日本の南東海上で勢力を強めた太平洋高気圧の縁をまわって湿った気流が流れ込んだほか、4日には九州に上陸した台風第17号の影響も加わり、1～4日は、西日本の各地で大雨となるほか関東地方の各地で竜巻が発生した。秋雨前線の北側には寒気も流れ込んだため、西日本では気温の低い日が多く、9月上旬としては20年ぶりに旬平均気温がかなり低くなった。15～16日は、東海地方に上陸して三陸沖に抜けた台風第18号とその北側に停滞していた秋雨前線の影響を受け、北日本から西日本にかけての広い範囲で大雨となり、各地で河川の氾濫や土砂崩れ等の大きな被害が発生した。福井県、滋賀県、京都府では記録的な48時間降水量となり、大雨特別警報が発表された。また、この台風に伴って、各地で竜巻等の突風が発生した。東・西日本では、この15～16日を除くと、中旬以降は移動性高気圧に広く覆われて晴れの日が多く、中旬の西日本および下旬の東日本日本海側と

西日本太平洋側の日照時間は1961年の統計開始以来最も多くなった。なお、関東地方だけは台風第20号が南海上を北東進した影響で、24～26日に曇りや雨となった。北日本では、中旬以降、天気は周期的に変わり、24～25日には前線の活動が活発となり、北海道ではまとまった雨となった。沖縄・奄美では、中旬以降も湿った気流の影響を受ける日もあったが、高気圧に覆われて晴れの日が多く、一部の地域では少雨の状態が継続した。

10月 北日本から西日本にかけて上旬に記録的な高温となり、全国的に多雨・寡照となった。台風第26号の影響で東日本太平洋側では大雨となった。

日本の東海上の太平洋高気圧の勢力が平年より強く、また偏西風も平年に比べて北寄りに流れたため、北日本から西日本にかけて上旬に記録的な高温となった。これらの地域の月平均気温はかなり高く、特に東日本の月平均気温は+1.9℃で、1946年の統計開始以来、1998年と並んで1位タイの高温となった。一方、台風の接近数が多かったこと（10月に接近した台風の数と1951年の統計開始以来の順位は、日本への接近数6個で1位、沖縄・奄美への接近数4個で1位、本土（北海道、本州、四国、九州）への接近数3個で2位タイ）や秋雨前線の影響で、全国的に降水量が多く、日照時間は少なかった。北日本では降水量がかなり多く、日照時間はかなり少なかった。東日本と西日本日本海側では、降水量がかなり多かった。また、台風第26号が発達しながら日本の南海上を北上し、大型で強い勢力のまま16日に暴風域を伴って関東地方沿岸に接近した影響で、住家被害、土砂災害、河川の氾濫等が発生した。特に東京都大島町では、16日の朝までの24時間に、平年の10月の降水量の2.5倍に相当する824.0mmもの記録的な大雨が降ったため大規模な土砂災害が発生し、多くの人的被害が発生した。

11月 上旬は全国的に気温が高かったが、中旬以降はたびたび強い寒気が南下し、東・西日本と沖縄・奄美では気温が低くなり、北日本日本海側では降雪量が多くなった。

上旬は、日本付近を低気圧と高気圧が交互に通過し、全国的に変わりやすい天気となった。上旬の後半には日本海を発達しながら低気圧が次々と進んだため、暖かく湿った空気が流れ込み、日本海側では降水量が多く、全国的に気温が高かった。中旬以降は冬型の気圧配置の日が多かったため、日本海側では曇りや雨または雪、太平洋側では晴れの日が多くなった。中旬前半は北日本から東日本を中心に強い寒気に覆われたため、北・東日本日本海側の広い範囲で雪が降り、北日本日本海側では中旬の降雪量が多くなった。中旬後半以降は、たびたび強い寒気が沖縄・奄美まで南下したため、東・西日本と沖縄・奄美の月平均気温は低くなった。なお、25日から26日にかけては発達中の低気圧が日本海を北東に進み寒冷前線が日本付近を通過したため、全国的に大荒れの天気となった。

12月 東日本太平洋側を除き全国的に降水量が多かった。沖縄・奄美では気温がかなり低くなり、北海道ではかなり高くなった。

冬型の気圧配置となる日が多かったため、北日本から西日本にかけての日本海側では曇りや雪または雨の日が多く、太平洋側では晴れの日が多かった。沖縄・奄美では、気圧の谷や寒気の影響を受ける日が多かったため、曇りや雨の日が多く、月間日照時間がかなり少なくなった。たびたび低気圧が本州付近を通過したため、月降水量は東日本太平洋側を除き全国的に多かった。西日本を中心に寒気が流れ込んだため、月平均気温は、沖縄・奄美でかなり低く、東・西日本で低かった。一方、北海道地方は寒気の南下が平年に比べて弱かったため、月平均気温はかなり高かった。降雪の深さ月合計は、北日本日本海側のうち東北日本海側は平年並だったが、北海道日本海側ではかなり少なかった。一方、西日本日本海側では多く、東日本日本海側は平年並だった。

表1 梅雨入り・梅雨明けの状況（平成25年）

梅雨入り

地域	本年	平年	前年
沖縄	5月10日頃	5月9日頃	5月13日頃
奄美	5月10日頃	5月11日頃	5月13日頃
九州南部	5月27日頃	5月31日頃	5月30日頃
九州北部	5月27日頃	6月5日頃	5月30日頃
四国	5月27日頃	6月5日頃	6月2日頃
中国	5月27日頃	6月7日頃	6月8日頃
近畿	5月27日頃	6月7日頃	6月8日頃
東海	5月28日頃	6月8日頃	6月8日頃
関東甲信	6月10日頃	6月8日頃	6月9日頃
北陸	6月18日頃	6月12日頃	6月9日頃
東北南部	6月15日頃	6月12日頃	6月9日頃
東北北部	6月15日頃	6月14日頃	6月9日頃

注：気象庁資料による（以下の表において同じ。）。

梅雨明け

地域	本年	平年	前年
沖縄	6月11日頃	6月23日頃	6月23日頃
奄美	6月29日頃	6月29日頃	6月29日頃
九州南部	7月8日頃	7月14日頃	7月23日頃
九州北部	7月8日頃	7月19日頃	7月23日頃
四国	7月8日頃	7月18日頃	7月17日頃
中国	7月8日頃	7月21日頃	7月17日頃
近畿	7月8日頃	7月21日頃	7月16日頃
東海	7月7日頃	7月21日頃	7月23日頃
関東甲信	7月6日頃	7月21日頃	7月25日頃
北陸	8月7日頃	7月24日頃	7月26日頃
東北南部	8月7日頃	7月25日頃	7月26日頃
東北北部	8月10日頃	7月28日頃	7月26日頃

(2) 被害概況

平成24年12月以降、北日本の日本海側を中心に積雪量が多くなり、果樹の樹体損傷等による20億円の被害が発生した。

4月中旬から5月上旬にかけて、強い寒気が日本付近に流れ込んだ影響により低温となり、全国の広い範囲で降霜が数日あり、果樹の結実不良及び茶の新芽の変色等による75億円の被害が発生した。

平成25年10月の日本への台風の接近数は、昭和26年以降で最も多い6個（平年値1.5個）となり、台風第18号では果樹の落果及び水稲の倒伏等による45億円、台風第26号及び第27号では果樹の落果及び野菜の冠水等による23億円の被害が発生した。

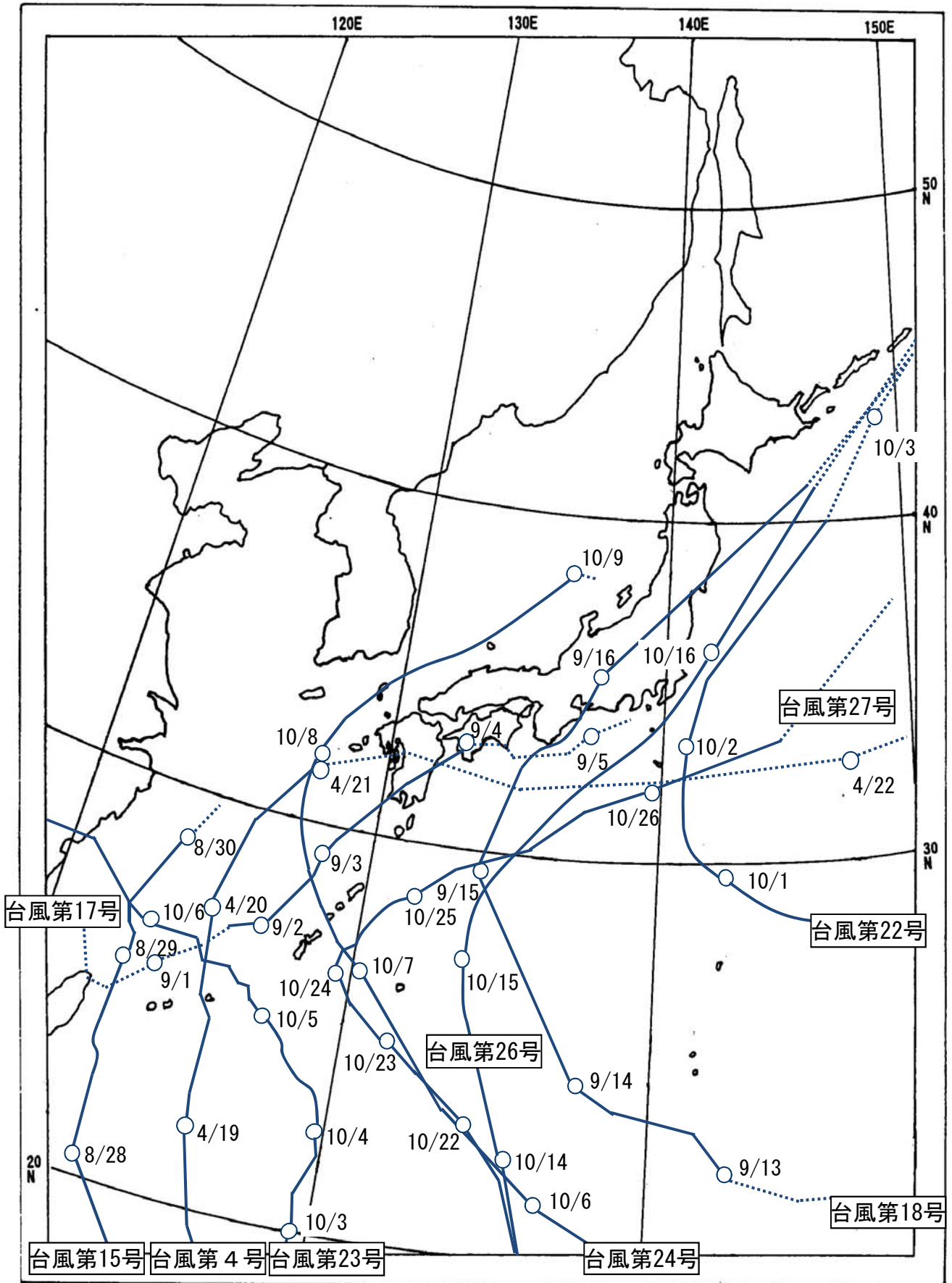
このほか、9月中旬以降にトビイロウンカが西日本地域で多く発生したことにより、水稲で105億円の被害が発生した。

なお、発生した主な被害は表2のとおりである。

表2 平成25年に発生した主要災害種類別被害概況（総数）

災害種類名	被害発生時期	被害面積	被害見込金額	主な被害農作物	主な被害地域
平成24年12月以降の降雪等	平成24年 12月以降	5,740 ha	20 億円	果樹、野菜、麦類	青森県、北海道、 秋田県 等
4月中旬以降の降霜	4月中旬 ～5月上旬	15,400	75	果樹、工芸農作物（茶）	長野県、静岡県、 栃木県 等
台風第18号	9月15日～16日	47,100	45	果樹、水陸稲、野菜	群馬県、青森県、 京都府 等
台風第26号及び第27号	10月15日～26日	18,700	23	野菜、果樹、工芸農作物	千葉県、茨城県、 岩手県 等
虫害 (トビイロウンカ)	9月中旬以降	91,500	105	水稲	佐賀県、大分県、 福岡県 等

(3) 平成25年に日本列島に上陸・接近した台風経路図



- 注：1 経路上の○印は傍らに示した日の午前9時の位置を示す。
 2 経路の実線は台風、破線は熱帯低気圧・温帯低気圧の期間を示す。
 3 気象庁資料から作成した。